

な 名も知れぬ雑木林に学ぶ

私が事業承継して現役を引退してから七年が経とうとしている。ご隠居の地として選んだのが木々と草花に囲まれた土地で、それまでまちなか暮らししか知らず、まちのことはある程度理解する知識や経験があるものの、木々や草花の名前もロクに知らない私がこのような環境で暮らすことになろうとは思ってもいなかった。

この土地は今から五十年ほど前に丘陵部を籬壇状に造成したものののだが、区画が千から二千坪という規模で十区画ほど売りに出したものの、半分も売れずに市街化調整区域に指定され手付かずで今日に至ったようだ。私が入手した土地には前住者が廃棄した建物が無残な姿をさらし、放置された土地は湿地同然の状態だった。ここで見られる木々や草花は前住者が植えたものではなく、造成裸地から自然再生したものと見受けられた。

自然に囲まれた田舎暮らしなどガラでもないと自負していた私だが、実際に暮らし始めるといやがおうでも木々や草花や小動物と出会うことになる。ご隠居の暇にまかせてそれらを一年を通して観察したり、湿地を改善するためにスコップ一つで水路や池を掘るなどしているうちに、この小さな自然も日々、年々、動いていることが見えてくる。木も樹種を調べると湿地でも根付く木々が大木となり、その周りに子孫の若木が囲んでいる。あまり水気を好まない木も生えているのだが、それは一見平坦な造成地と思っていたなかでわずかに高くなったところだとわかる。そういう目で見ると、草花も住み分けにより多様な種類があることが分かった。同時にそれらの境界部分ではせめぎ合いも見られ一進一退だったりする。木々による日当たりの違いも影響を与え、強風で木が倒れるとその周りの草花や木々の子どもたちも変化してくる。なぜ、そこにその木や草花が生えてるのかには自然の原理があることがあらためてわかるのだ。

まちづくりプランナーとして、もつと早くそういう目を持ってまちの中に残る雑木林などを見ることができれば、また違った考えを持つことができたかもしれない。名も知れぬ雑木林に学んだ私の体験を多くの方にも知ってほしい。詳しくは拙著の「人生百年時代をデザインする 竹山に暮らして」をお読みいただければと思う。